慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代ロシア語学における機能的文体とはいかなるものか：「学術の文体」の特性とその実践のために
Sub Title	The academic style in the functional stylistic of the Modern Russian language
Author	中澤, 朋子(Nakazawa, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2010
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.7, (2010.) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	В данной работе изображаются особенности научного стиля, являющегося одним из функциональных стилей. Функциональные стили изучаются, прежде всего, как языковая динамика, представляющая собой внутреннюю дифференциацию литературного языка. В связи с этим в русской филологии функциональный стиль рассматривается как научное направление в изучении современного русского литературеного языка. Соответствующие исследования распространяются достаточно широко. Однако в изучении русского языка и русской литературы на японском языке почти не встречается даже самого ключевого слова «функциональный стиль»: в Японии, может быть, вообще слово «стиль» понимается только как «стиль писателя» и, в силу этого, чаще всего развивается только «наука о стилях художественной литературы». Включение в дальнейшие планы занятий функциональной стилистикой, конечно, полезно и для японцев; это дало бы возможность более четкого, ясного и дифференцированного понимания и усвоения современного русского литературного языка. Цель данной статьи – показать признаки научного стиля и представить его в качестве масштабного образа для усвоения навыков письма на русском языке. Для достижения этой цели будут выполняться задачи в следующем порядке: 1) описание разных направлений стилистики в науке о современном русском языке, их история и развитие в русской филологи; 2) определение функциональных стилей и их разновидностей; 3) выявление особенностей научного стиля и анализ текстов, относящихся к такому стилю; 4) доказательство необходимости ознакомления с функциональными стилями при обучении русскому языку как иностранному в японской аудитории.
Notes	研究論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20100000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代ロシア語学における
機能的文体とはいかなるものか

──「学術の文体」の特性とその実践のために ──

中　澤　朋　子

В данной работе изображаются особенности научного стиля, являющегося одним из функциональных стилей. Функциональные стили изучаются, прежде всего, как языковая динамика, представляющая собой внутреннюю дифференциацию литературного языка. В связи с этим в русской филологии функциональный стиль рассматривается как научное направление в изучении современного русского литературеного языка. Соответствующие исследования распространяются достаточно широко. Однако в изучении русского языка и русской литературы на японском языке почти не встречается даже самого ключевого слова «функциональный стиль»: в Японии, может быть, вообще слово «стиль» понимается только как «стиль писателя» и, в силу этого, чаще всего развивается только «наука о стилях художественной литературы». Включение в дальнейшие планы занятий функциональной стилистикой, конечно, полезно и для японцев; это дало бы возможность более четкого, ясного и дифференцированного понимания и усвоения современного русского литературного языка.

Цель данной статьи – показать признаки научного стиля и представить его в качестве масштабного образа для усвоения навыков письма на русском языке. Для достижения этой цели будут выполняться задачи в следующем порядке: 1) описание разных направлений стилистики в науке о современном русском языке, их история и развитие в русской филологи; 2) определение функциональных стилей и их разновидностей; 3) выявление особенностей научного стиля и анализ текстов, относящихся к такому стилю; 4) доказательство необходимости ознакомления с функциональными стилями при обучении русскому языку как иностранному в японской аудитории.

はじめに

日本の研究の場においてもしばしば論文や要約文をロシア語で書くことを求められる。そのさい、われわれはこれまでに読んできたロシア語論文をモデルにしているはずであり、そしてそのさいに、ある一定のスタイルを志向しているはずである。本稿ではこの「ある一定の」ルールを、論文や要約文をロシア語で書くさいに求められるテクストのスタイルである学術の文体 научный стиль として、現代ロシア標準語の文体論研究の一分野である функциональная стилистика 機能的文体論のなかで捉え、そしてこのスタイルで守られるべき「ある一定の」ルールを明記し、さらにできるなら、学術の文体が教育の場における実践的指標となり得るか否か検討してみたい。

１．現代ロシア語学における文体論

「文体」とはなにか。「文体論」とはいったい何を研究する学問なのか。いわゆる「修辞学」からの流れをも汲むこうした問いに対する答えは、21世紀を迎えた今日において、暫定的であるにしろ、ある程度提示されている。それらは諸外国語学・文学研究で互いに影響を与え合いながら同時進行的に徐々に解明され始めている[1)]。そのなかでもロシア語学・文学研究にかんしては、「文体」という概念についての「一応の答え」が導きだされているため、ロシア語学者たちはそれについての抽象的且つ思弁的な議論などはほぼ皆無であるという[2)]。それでは、ロシア語学者たちが出したその「答え」とはいかなるものなのであろうか。

かつて1920年代に発生したプラハ学派は三つのテーゼを発表し、先行するロシア・フォルマリズムとともに「文体論」の発展に大きな影響をもたらした[3)]。これらの20世紀初頭の言語・文学理論研究の主流であったいくつかが組み合わされ、フォルマリズムによる詩的言語の研究から「文語の特質の中に規範性と同時に安定性を認める」[4)]ようになったプラハ学派は、「文体」についての定義を「言語の構造的総体の個性的な組織化」[5)]とし、「言語手段の文体論的な評価が十分になされるためには、言語がよく安定し、文語の規範が十分に統一性を示すことが条件であることに気がつく」[6)]こととなり、やがて「文体論の体系化」[7)]へとつながってゆくことになる。それは「個々の表現に固有な文体、有名な作家に独特な文体の研究と、例えば、手紙とか、論文とかにみられる表現の文体の種類をプラクチカルに習得すること、それらのいずれよりも、さらに重要なこととみなされているのは、個々の言語の法則性を明らかにするような、それらの言語の文体的な諸現象の体系的解釈」[8)]にほかならない。こうした解釈こそが、現代ロシア語学における文体論研究の根幹を成しており、それはいまなお受け継がれている主流な文体論の傾向に大きな影響を与えるところとなった。かれらが取り組んでいた研究の志向は、1960年代には言語構造の研究からその「機能性」への関心という一般的な急転換を迎え、その

ころから言語を静的なものとしてではなく動的なものとしてそのモデルを追究するロシア標準語研究の一分野として確立されたのである[9)]。

今日のロシア語学において、文体について語るさい、まずはその領域がいくつかに限定される。それは、文体というものが絶対的なものではなく、表現内容や目的、シチュエーション、コミュニケーションが行われる層などによって決定付けられ、規定され得るものであり、文体論とはそうした多種多様なところにある「言語」を研究する科学であると捉えられているからである[10)]。

このように言語の「機能性」に刮目してなされるロシア語文体論は、今日ではじつは以下のようにいくつかの分野に分けられている。１）資源文体論；２）機能文体論；３）言語芸術文体論；４）テクスト文体論；５）実用文体論とよばれるこれらの文体論は[11)]、それぞれの分野において、その研究対象の関心が少しずつ異なってくる。

これらの文体論のそれぞれの特徴として、１）資源文体論とはまた「言語の文体論的資源」ともよばれ、そこでは言語の文体論的同義語に焦点があてられる[12)]。２）機能文体論は、本稿でまさしく取り上げるものであり[13)]、また３）言語芸術の文体論とは、じつは２）機能文体論において大別される文体のカテゴリーのうちのひとつが内部でさらに深化し、展開される文体論であるとされている。言語芸術の文体研究は、その言語やテクストじたいがきわめて複雑に入り組むものであり、それゆえに、機能文体論のなかに含まれつつも、個別にその研究が発展していったと考えることが必要だという[14)]。そのようなわけで、これら言語芸術の文体研究はまず、機能文体論のなかの一つとして捉えられ、а）芸術的言語の文体論[15)]；つぎに、歴史的な標準語の発展の歴史的観点からの研究である б）芸術的文学作品の文体にかんする研究[16)]；そして最後に、в）芸術的テクストのコミュニケーション文体論[17)]といった３つの分野に分けられている。４）テクスト文体論は、文体論とテクスト言語学が交差する場所にある文体論の分野の一つで、テクスト全体が研究されるものである[18)]。最後に、５）実用文体論は、文体論のうちでも主要な原則として捉えられる文体論であり[19)]、機能文体論の知識が前提条件となってはじめて実現され得るものである。

こうして、現代ロシア語学において文体論は細分化され、整理され研究されていることがわかる。そしてその根底には、言語やテクスト、言語活動の「機能」がまずあるといえるのである。

２．機能文体論

話されたあるいは書かれたテクストとは、あらかじめ与えられたありとあらゆる言語的可能性―音声学的、文法的、語彙的、統語的可能性―のうちから、話者による選択の結果として、またその目的とかかわる発話行為におけるそれらの集合体としてあるものである、とふまえることができる。「コミュニケーション的」あるいは「機能的」文体の言語活動の概念は、文体

論についてのこうした解釈の基本であり、すなわちこれが機能文体論の原理となる[20)]。

そこでこの文体論的な分析は、テクスト全般の構造におけるさまざまなレベルにおける単位の機能の特性を示すことに向けられる[21)]。すなわち機能文体論における分析では、書き手あるいは話し手が、その言語テクストをいかなるコミュニケーションの層において、どのような目的で、誰にむけて、何のために発信したのか、どのような可能性のうちから選択したものなのか、をさまざまなレベルにおいて研究することに関心が向けられるのである。

まず、ある「言語」はひな型的で社会的に有意なコミュニケーションの層―学術的、芸術的、社会評論的、公的商業的、日常口語的、そして部分的には宗教的、といった層―に分けられる[22)]。この分類に呼応して、機能文体論の文体のグループがまず決定されることとなる[23)]。機能文体論とはすなわち、「コミュニケーションにおいて一定の機能をはたす標準語のヴァリエーション」[24)]であり、別のいいかたをすれば、その分析は「テクスト全般の構造のなかでさまざまなレベルにおける単位の機能の特性を示すことに向けられて」[25)]いるものである。そしてテクストに対するこうした機能文体論上のアプローチは、ジャンルの種類を厳密に規定しつつ行われる分析のさいにとくに有効であると考えられている[26)]。

機能文体論のカテゴリーは研究者によっても異なるが[27)]、もっともスタンダード且つオーソドクスなものとしては、以下の５つに大別される[28)]。

> научный стиль 学術の文体：専門用語や抽象的語彙の広い使用により特徴づけられ、伝達の機能を実現する。主に単語は直接的で具体的な意味で用いられ、特殊な言い回しをもち、複雑な統語論的構成の傾向がみられる。学術的な文体は、科学技術、学術公的、学術的通俗的、学術刊行物、学問的学術といったような下位区分に分けられる。
>
> официально- деловой стиль 公的・商業の文体：伝達の機能を実現する。独特な語彙群や言い回し（公的で事務的）をもち、決まり文句や公印の広い使用などにより特徴づけられる。
>
> публицистический стиль 社会評論の文体：社会的政治的語彙や慣用表現を広く使うことにより特徴づけられ、働きかけと伝達の機能を実現する。社会的・政治的評論文や定期刊行物（新聞、雑誌）、政治的演説などにおいて認められる。
>
> обиходно-разговорный стиль 日常会話の文体：伝達の機能を実現する。機能（シチュエーションの文脈、言語活動による直接的なコミュニケーション）の独特な状況により特徴づけられ、語彙外的手段（イントネーション、中断、発話のテンポなど）や言語外的要因（顔の表情、ジェスチャー）、日常慣用的語彙や言い回し、感情表現的語彙や小詞、間投詞などの広汎な使用により特徴づけられる。口語においては、標準的口語と常用的口語とに分けられる。

художественный стиль 芸術的文体：働きかけの機能を実現する。特性としては、言語のコミュニケーション性と美的機能性との統一性、文体論的下部組織の多様性、他の文体の要素の根拠ある使用や再構築、感情表現的で描出的な言語手段の使用、個別化された文体（作家の文体）などが挙げられる。

これらのグループはそれぞれに標準的な規範をもち、それらが一定の「許容範囲内」で守られることにより、それぞれの層における言語あるいはテクストとなる。この観点からいえば、文体の研究とは、たんなる語彙論や形態論、統語論的といったいわゆる文法的な分析の研究とは若干異なってくる。というのも、厳密に守られなくても、あらゆる可能性のなかから選択された言語的材料で以てその「層」に達していると「たらしめる」ものの総合体こそが文体だからである[29)]。それらの文体はすべて閉じられたシステムを形成するのではなく、それぞれが相関関係で結ばれており、互いに影響力をもつ。こうしたそれぞれの文体の言語あるいはテクストの法則性や内部構造的組織を研究するのがすなわち機能的文体論である[30)]。先にみてきた「文体論の体系化」の論理をふまえると、体系的解釈のための「個々の言語の法則性を明らかにする」作業は逆ベクトルに向けるために行うこともちろん可能で、その小さな終着地点が実用的な言語使用に設定されてもよいわけである。なによりもまず、「表現の言語手段の特性に向けられている」[31)] 機能的文体論のこうしたアプローチは、「厳しく厳密に限定された学問、社会評論、商業といった類の文体の分析のさいに有益なものである」[32)] とされている。こうしたこともふまえたうえで、これら文体の種類のうち、本稿では「学術の文体」という概念を明らかにする。

３． 学術的な文体の特性

学術の文体には、さまざまな「学術的な」テクストが含まれ、その目的は「学術的な情報の伝達や保存」[33)] とされる。あるいは、それのみならず、「事実の証明」[34)] といったものも含まれる。

これは、学術的な情報の伝達や保存のために使用するものであり、その形式としては、書かれたもの（要点、要約、概略、モノグラフ、学術論文、評論、短評、教科書）と口頭によるもの（発表、報告、講義）がある[35)]。「学術の文体の機能はふつう知性のコミュニケーションとしてのそれが規定されている。しかしこの場合、この文体の基礎は、論理的な情報の伝達のみならず、事実の証明も含まれる」[36)]。この文体の基本的な特徴は、言表の論理性、一貫性と明確性、簡潔さ、具体性、客観性が挙げられる。学術の文体においては専門用語がひろく用いられ、中立的で文語的な単語が一般的且つ抽象的な意味で用いられる。学術の文体においては名詞が多用される。さまざまな記述的構文などの形をした複文が多用されることも特徴の一つで

ある[37)]。

そこで、具体例をじっさいにみてみると、以下のようなものが抽出され得る。

［例文①］

Церковное пение Древней Руси прошло длительный пути развития – от первых, еще робких подражаний византийскому канону в начальный период до самобытных образцов ранного многоголосия во второй половине XVII в. Как протекал процесс развития древнерусского певческого искусства? Какие периоды можно выделить в его истории?

Наше исследование, выполненное по рукописным источникам всего периода Средневековья, а также расшифровка конкретных песнопений позволили провести стилистический анализ церковного пения на звучащем материале. В результате история развития певческой культуры предстает перед нами как смена различных певческих «стилей», в каждом из которых проявляются типичные черты стиля каждой эпохи.

Для характеристики исторических периодов древнерусской певческой культуры, признаков стиля каждого из них мы обращаемся к основным музыкальным и музыкально-просодическим свойствам песнопений важнейших распевов, представляющих совокупный стиль данной эпохи.

Традиционная периодизация связана с изменениями в редакции текстов певческих книг и так называемыми книжными справами, проходившими на Руси в XV и XVII вв. По особенностям редакции текста выделяется три периода, обозначающие главные вехи в развитии литургической поэзии:

1) староистинноречие, XI – середина XV в.;
2) раздельноречие, середина XV – середина XVII в.;
3) новоистинноречие, 2-я половина XVII – начало XVIII в.

[……]

(*Г.А. Пожидаева* «Певческие традиции Древней Руси»[38)])

「例文①」は、音楽にかんする専門書の結論部分である。

語彙的な特徴としてはまず、専門用語で対象をはっきりと描写されることであり、これにより意味内容が明確に理解され得る。たとえば、*канон, многоголос, многоголосный,*

демество, ладоинтонационные, клиросной, староистинноречие, раздельноречие, просодия, новоистинноречие, мелизматики, силлабика, распев, литургический などである。また、キーワードとなる語が繰り返されることも語彙的特徴の一つであり、*культура, песнопение, певческий, музькальный, пение, напев, стиль, структура* などは幾度も認められる。それらは単独での単語使用のみならず、語結合というかたちでも用いられ得る。たとえば、*певческая культура, церковного пения, знаменный распев* など。概して比喩表現がみられないもの学術の文体の大きな特徴のひとつであるが、いっぽうで、たとえば *так называемыми* などのような慣用的語法が認められるのも同じく大きな特徴のひとつである。

形態論的特徴としてはまず、動詞から派生した名詞、とくに接尾辞に -ениj-(-анj-) をもつ名詞が多く用いられることがあげられる。たとえば、*пение, развитие, исследование, изменение, созданию* など。客観性と非感情表現性で満たされることも特徴としてあげられ、そのため人称代名詞ならびに動詞の活用形では、一人称単数形はほぼ用いられない。このように中立的な記述が目指されるため、この分析の対象であるテクストにおいても、三人称の変化形語尾の動詞が多く認められる。たとえば、предстает, выделяется, определяет, позволяет など。主体を表現するさいに用いられやすい人称代名詞としては一人称複数形 мы であり（“*перед нами*”, “*мы обращаемся к...*” など）、また指示代名詞三人称 это などが用いられる、具体的な主体がぼやかされることも特徴的である。このテクストにおいては、さらに *наше исследование* といったように、所有代名詞でも一人称複数のかたちが認められる。また形動詞や副動詞が多く用いられることも学術的な文体の特徴である。たとえば、“*Наше исследование, выполненное...*”, “*важнейших распевов, представляющих...*”, “*три периода, обозначающие...*” など。

統語論的特徴としては、学術的なテクストにおいては論理の一貫性が目指されることから、段落ごとの論理の展開が連係の様態をしていることが多い。このテクストでは、論文の基礎ともいうべき「問い立て」がなされている。その「問い」に答えるべく、論理が展開されてゆき、終わりに至るまで簡潔にそれまでの研究の根拠と裏付けと正当性にかんする記述が認められる。生格形の名詞の結合が非常に多く用いられることも大きな特徴であるが、その場合それらが「鎖」のようにいくつも重なることも多々ある。たとえば、“*Для характеристики исторических периодов древнерусской певческой культуры, признаков стиля каждого из них...*”, “*В результате история развития певческой культуры предстает...*” など。また、文の同位成分や独立構文、導入句や挿入句などが用いられることも特徴として挙げられる。たとえば、“*важнейшие структуры напева и песнопения...*”, “*музыкального языка и просодии церковных песнопений*”, “*книжными справами, проходившими на Руси в XV и XVII вв.*” “*три периода, обозначающие главные вехи в развитии литургической поэзии*” など。また、

記述による形式ではなく口頭によるテクストである場合には、日常会話の文体の要素がより増す、ということは認められる[39]。

こうして、基本的な学術の文体の特徴というものは存在するが、より細かく分析していった場合のそれらにかんしては、それぞれのテクストにおいてじつは相違がある。とはいえ、これが学術の文体の規範を破っているということにはならず、ただ単に個人的な好みもある程度反映され得るものである。この多様性こそがすなわち文体における規範の許容性である[40]。

次に、学会において行われた発表の要旨であるテクストを検討する。

［例文②］

[……]

Процесс переразложения в формах 3-го лица множественного числа прошедшего времени первоначалино затрагивал старые показатели аориста *-ша* и имперфекта *-аху*; со временем к ним добавился новый изофункциональный показатель *-(а)ли*. Старые грамматические значения стали выражаться особыми суффиксами совершенного *(-ну-)* и чаще несовершенного вида (*-а-, -ыва-*). Одкако дальнейшее развитие эловой формы пошло по пути не синтетическому, а агглютинативному, т. е. *-л-* имеет значение только прошедшего времени и легко выделяется, а *-и*$_2$ имеет значение множественного числа, уже не являясь показателем рода и падежа. Эта флексия сама синтезировала прежний внутренний показатель основы **о* краткое со внешним показателем числа **i* в результате монофтонгизации дифтонга под нисходящей интонацией. В конце концов при местоименных основах она стала агглютинироваться, допуская после себя падежные показатели: *эт-и-хъ, эт-и-мъ, эт-и-ми; одн-и-хъ...,; сам-ихъ..., И-хъ, и-ми* можно назвать источником аналогии.

[……]

(*Д.Г. Демидов*«Агллютинация внешних именных флексий *-и* и *-ы* в значениях множественного числа»)[41]

このテクストはロシア語史のテーマでおこなわれた学会における研究発表での報告を紙面に起こしたテクストである。発表後の要旨とは、もともとは口頭によるテクストを紙面「記録」されたものであり、その語彙的、形態論的、統語論的特徴は学術論文におけるそれらとほぼ同一である。*переразложения, 3-е лицо, множественное число, прошедшее время,*

аориста, имперфекта, суффикс, совершенный вид, несовершенного вид, синтетический, агглютинативный, флексия, монофтонгизация, дифтонг, интонация, местоименная основа, агглютинироваться, падежный といったように専門用語が多用されながらテクストのジャンルをまず決定付けており、また形態論的にみても一人称単数形や二人称単数・複数形は用いられておらず、主語に人物がたつ文章は見られない。すなわち、「例文②」において、すべての文章の主語は事物であり、多くは現在形で用いられているが、ここである現象の歴史的経過を詳述するさい、“*Процесс…затрагивал…*”, “*грамматичесеие значения стали выражаться…*”, “*дальнейшее развитие … пошло по пути…*”, “*Эта флексия сама синтезировала…*”, “*…она стала агглютинироваться…*” といったように過去形が用いられてもいる。

「例文②」でもっとも明確に抽出しやすいのは、学術の文体の核ともいえるべき、統語論的特性である。“*Процесс переразложения в формах 3-го лица множественного числа прошедшего времени первоначалино затрагивал..*” といったように生格の連なりがみられ、また多くの文章において、主語が述語の前に置かれる直接語順 прямой порядок слов が認められる。たとえば、“*Старые грамматические значения стали выражаться особыми суффиксами…*”, “*дальнейшее развитие … пошло по пути…*”, “*Эта флексия сама синтезировала прежний внутренний показатель…*” など。

最後に、以下のようなテクストを検討したい。

［例文③］

[……]

Первые образцы любовной поэзии относятся в Японии к VII-VIII вв. Именно тогда появилось знаменитое собрание «Манъёсю» – «Собрание мириад листьев», как поэтически переводится название этой антологии. В ней более 4,5 тысяч стихотворений, и большая часть – о любви. Именно во времена «Манъёсю» выделилась целая плеяда замечательных поэтов –Какиномото-но Хитомаро, Яманоуэ – но Окура, Отомо- но Якамоти, с творчеством которых вам предстоит познакомиться. «Манъёсю» стала важной вехой в развитии японской литературы не только потому, что это была вообще первая японская поэтическая антология, но и потому, что это было, по сути, собрание стихов – *танка*.

Танка – это стихотворный жанр, главенствующий в японской поэзии

древности и периода средневековья. В стихах – танка всего 5 строк и обязательно 31 слог. Японская поэзия, в отличие от русской, не знает рифмы, и европейцу, не владеющему японским языком, но услышавшему стихотворение, прочитанное по-японски, вообще трудно догадаться, что это поэзия. Однако, несмотря на отсутствие рифмы, японские стихи на самом деле очень мелодичны. Это достигается благодаря строго установленному количеству слогов в каждой строке пятистишия – танка.

[……]

(«Японская любовная лирика»)[42)]

「例文③」は愛をテーマに詠った日本の和歌を集めロシア語訳した本の前書きである。分野としては日本文学として考えてよいであろう。おもに詩論であるため、一構成要素である語彙も詩法や詩にかんするものが多く使われている。

この例文でもっとも興味深いのは、形態論的にみたさいの人称代名詞 вы が用いられていることである（“*...с творчеством которых вам предстоит познакомиться*”）。これは、必ずしも日本文学の専門家だけが読むものではなく、日本文学を知らないけれど知りたいという読者をも想定して書かれた、いわゆる解説的なテクストであるため、ジャンルとしては学術の文体のなかの下位区分である学術的通俗的文体で書かれているものとすることができる。学術的通俗的文体は、原則としてその特徴をすでにみてきた学術的テクストともほぼ同じくするが、「受け手の知識のレベルが若干異なってくる」[43)]。

このように、学術の文体の特性を受け取ることができるのなら、ある程度の規範を破らず、その特性を逆に構築してゆけば、学術の文体の層に属するテクストを生み出すことが可能になる。以下のように、きわめて端的に学術の文体の特性をとりあげてくれている文献もある[44)]。

語彙論：а）専門用語
　　б）キーワードが頻繁に繰り返される
　　в）比喩的な単語が使われない
形態論：а）名詞が多い
　　б）動詞から派生した名詞がしばしば用いられる
　　в）一人称と二人称の人称代名詞は用いられず、それらのかたちの変化形である動詞は用いられない
　　г）感嘆の小詞や感嘆詞は用いられない

統語論：a）直接語順［述語の前に主語が立つこと］がより好まれる
б）名詞（生格）＋名詞（生格）の語結合性の多用
в）複文が多い
г）形動詞構文ないし副動詞構文がよく用いられる

4．ロシア語教育と文体論

こうして、本稿において瞥見してきた機能的文体と文体論の理論は、ロシア語教育に適用することは可能であろうか。そしてそれは有益な方法として作用するであろうか。

一つに、1960年代以降の現代ロシア標準語の科学の一分野である機能的文体と文体論の理論は、いいかえれば標準語の規範と密接にかかわっているものであるため、それはロシア語を第一言語とする人々にとっての実用的なロシア語そのものに直に影響すらしてくる。たとえばロシア人学生に課される大学入試科目のロシア語作文の能力低下が顕著になっていたさい、こうした文法・文体の誤りや無知といった問題は、入試を実際に受ける学生たちによって引き起こされたものではなく、指導する立場の教員たちもまた「いかに書けばよいか」、もっと言ってしまえば「いかに指導すればよいか」の理論を把握する手立てすら持ち合わせていなかったという[45)]。ロシア語学研究において標準語の文体論研究がここまでの発展を迎えている今日では、学生たちはこの学問の理論を知ることができ、この理論をもとに、文体のセンスをみがくようコージナは促しているのである[46)]。

そしてそれは、われわれ外国人にも不可能なことではなく、むしろ必要なことである。たとえば、『教え方を学ぼう』のテクストの章ではそのジャンルについて言及され、それらテクストのジャンルを学習者に伝えることで「読む活動」のさいには学習者の過度な負担を軽減すること、また「書く活動」ではあらかじめ一定のジャンルにおいて決まっている「決まり表現」を紹介したうえで学習者を「書く」という行為に導くことが推奨されている[47)]。またたとえば、文体論にかんするある補助教材では、機能的文体についての理解を深めたうえで以下のような練習問題を学習者に課している[48)]。これは、五本の指をそれぞれ機能的文体における各カテゴリーとみなしたとき、それら一つひとつが孤立的に独立したものではなく、お互いに相関関係をもちながら存在しているものである、という機能的文体の特性を、学習者みずからが簡潔に説明できるよう工夫が施されている優れた問題である。

Упражнение 3

Перед вами изображение ладони. Скажите, как с помощью этого рисунка можно продемонстрировать соотношение функциональных стилей русского литературного языка?

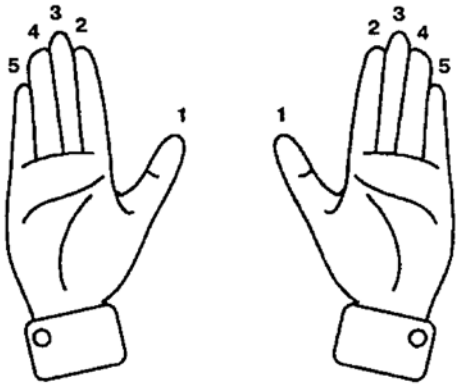

Рис. 1 *Рис. 2*

このように、ひととおりの文法を終え、基本的な語彙も身についてきたいわゆる中・上級に相当するロシア語学習者の次なるステップへの移行には機能的文体や文体論の理論は有益であり、この理論を基にするなら、最近では流行らなくなったとされる文学作品の講読も、やり方によっては一定の意味を持つのではないだろうか[49)]。また、専門的にロシアにかんする研究を行おうとする学習者を対象に、まさしく学術的なテクストを理解し、書くための補助教材もある。『論文や要約文を書こう』では、本稿でも取り上げた機能的文体における学術の文体に焦点を合わせ、学習者自身がこの文体の領域で書かれているテクストを読み、問題を解きながらがその特性を学んでゆく、というプロセスが配慮されている[50)]。

たとえば、日本でもすでに刊行されている『ロシア語表現辞典』[51)]は、機能的文体や文体論の理論が基礎におかれれば、その役割をより発揮するはずであり[52)]、また、エチケット表現にかんする著作や[53)]、ビジネスマンに必要不可欠な商業のロシア語なども[54)]、文体論とつながるものであることは疑いの余地がない。いま学んでいるロシア語の規範性の再認識と、それらをふまえたうえでの機能的文体や文体論の理論を通して捉えれば、より豊かな表現を発信できるに違いない。

おわりに

本稿では、機能的文体のうちの学術の文体のみを取り上げた。たとえばこの「学術の文体」を文法的なさまざまレベルから認識することで、ロシア語での論文執筆のさいの指標となり得る。授業においては、まずは学習者にその特性を提示することにより学習者たちが明確なヴィジョンを思い描くのをたすけることができる。あるいは「学術論文」といった大きなものを書くほどまでには達していない学習者においては、たとえば「短評 аннотация を書いてみよう」と題し、自分の好きな本の「短評」をじっさいに書いてもらうことで「書く活動」の実践的な授業となり得る。このほか「学術の文体」にかぎらず、「読む活動」である講読の授業において「新聞でであうロシア語と、詩作品でであうロシア語では何が『違う』のか」を分析する時間を設けたり、あるいはシチュエーションに合致する適切な語彙が選択できているかを資源文体論的観点から検討を重ねてゆくことにより、しだいに学習者もじっさいに適切なロシア語を使いこなせるようになってくるはずである。

本稿は、文体論のほんのわずか一部について瞥見したにすぎない。現代ロシア標準語の規範、そしてそれらとかかわる文体論の理論についてあらためて認識することは、外国語としてロシア語を学ぶわれわれ日本人―とくに、印欧語でもない日本語を第一言語にもつわれわれ―が、ロシア語をより適切に使えるようになるための有効且つ確実な手段になり得るはずである。ロシア語のテクストの文体を情緒的に処理するのではなく、機能的文体をはじめとする文体論の理論を意識することで目的に応じたロシア語表現がめざせるようになれれば、よりいっそうのロシア語学習効果が期待されるにちがいない。現代ロシア標準語の科学である機能的文体や文体論の理論をロシア語教育に取り入れることは、より高度なロシア語運用能力を身につける可能性を広げるであろう。

註

1）ロシア語以外の印欧語学研究における文体論をテーマにしたものとして、松浪有、池上嘉彦、今井邦彦編『大修館英語学事典』大修館、1983年、能登恵一「文体論とテクスト言語学―コセリウ（1980）との連関―」『思想と文化』第21号、岩手大学人文社会科学部、1986年、507-520頁、廣川智貴「ドイツ語文体論における教育文体論の可能性について」『西洋文学研究』第27号、大谷大学西洋文学研究会、2007、20-35頁、田島宏「いまなぜシャルル・バイイか―フランス文体論再生の動き―」『文体論研究』第45号、日本文体論学会、1999年、10-17頁、近藤愛紀「ソシュールの考えていた文体論―草稿から読み取れるもの―」『関西外国語大学研究論集』第91号、関西外国語大学、2010年、185-194頁、小野文「『ことばにおける主体性』を巡る二つの発話行為論―シャルル・バイイとエミール・バンヴェニスト―」『Résonances』第２号、東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集編集委員会、2003年、94-101頁、などを参照した。

2）「[…] 科学が発達するために生じてしかるべき、また避けられない見解の相違はあるにしても、文体論の対象は我が国の文体研究では最近多少なりとも確定化をみた。[…]」木村崇「ガリペーリン『文体』および『文体論』の概念について И. Р. ГАЛЬПЕРИН: О ПОНЯТИЯХ «СТИЛЬ» И «СТИЛИСТИКА» перевёл с русского」『中京大学教養論叢』第57号、1974年、233頁。

3）千野栄一「プラーグ構造言語学派における文体論の背景」『英語青年』第118号（2）、研究社出版、1972年、96頁。

4）同上97頁。

5）同上97頁。

6）同上97頁。

7）同上97頁。

8）同上97頁。

9）*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 9

10）Там же. С. 34

11）Там же. С. 35-44

12）ロシア標準語形成の過程において「文語」と「口語」のそれぞれのかたちの相互作用が重要な役割を果たしてきた。たとえば主に「文章語」においてはスラヴヤニズムが著しいとされ、文体論的には「公的」特性を獲得してきた。この場合、感情表現的レトリックによるニュアンスや荘厳性といったものはあまり表現されない。資源文体論とは、ロシア語においてはこうした伝統的な文体論でもあり、一定の単語のニュアンスを位置づけるのはその他の同義語のニュアンスとの差異が必要であるという観点において、すべての文体論の基礎ともよべるものである考えられている。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 35, 37-38. こうした「すべての文体論の基礎」という考え方にかんしてはまた、スチェパノヴァがシャルル・バイイの文体論にかんする解釈を取り上げながら、現代ロシア語文体論の軸となっている概念を「機能」とふまえたうえで、次のように述べている。「言語における機能的な選択とは、無数の同義的形式やそれらの列によって決定づけられるものであり、そうした列のうちの一つが『ニュートラルな背景』を作り出し、

そのほかのものはなんらかの付加的なニュアンスと―すなわち文体論的ニュアンスと区別される、というのがバイイの文体論にかんする解釈である。バイイによっては、主として、感情表現的なニュアンスは「低さ」をだし、日常的な口語、文語は「高い」ニュアンスとして理解されていた。(例：«лицо»（ニュートラル）– «лик»（高）– «рожа»（低））」。*Степанова Ю.С.* Стилистика// Языкознание. Большой энциклопедический словарь. М., 1998. С. 492-493

13）本稿の第２節で述べることとし、ここでは詳細は省略する。

14）*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 40

15）標準語とこの言語芸術の文体をまぜてはならないが、分断する必要もない。というのは、標準語の規範が「標準」となるのは、他でもない作家たち「加工」の結果が大きな要因であるためであり、芸術作品の言語は標準語のモデルである、としている。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 40, С. 139-

16）言語学文学研究的特性をもつ、歴史的にある研究分野であり、標準語と芸術作品のさまざまな文体との相互作用を研究するものである。それらがいかに歴史的な発展を遂げてきたか、そしてなによりもまずいかなる規模で発展の一定のレベルの標準語は文体論的な文学ジャンルの創造を実現可能にし得るか、という問題を扱う。ヴィノグラードフによってなされた社会的標準語を創造した19世紀のロシア標準語とはいかなるものだったのかということが基本にあるリアリズムの文体の発展の可能性の証明は、この文体論にカテゴライズされるものである。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 36, 40-41

17）この文体論は、発信者と受信者コミュニケーション活動の相関性の観点からテクストを研究する分野である、とされる。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 36, 41

18）テクスト文体論とは、テクストの構造的意味的まとまりやテクストのカテゴリーと言語使用の法則性をとおして、テクストの言語を研究する、現代では中心的且つもっとも重要な文体論の分野であるとされ、文体論そのもの（なによりもまず機能的文体論）と、テクスト言語学が交差する地点にあるものと捉えられている。テクストの本質に立脚しながらも、テクスト文体論においてもっとも重要なのは、構造的ではなく機能的な側面をみる必要があるということであり、構造的構成要素の役割を解明と、なんらかのコミュニケーション層における伝達の目的と課題にしたがって内容の効果的な伝達のためのテクストの展開の本質が、その分析の原理である、という。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 36, 43, 49-52

19）具体的なその目的や課題やシチュエーション、発話の内容、ジャンルやその他言語学外のファクターといった、コミュニケーションの層によって、なんらかの言語手段が用いられるとするならば、すべての話し手・書き手はそれらを習得する必要がある。実用文体論は、話し手の文体論的センスを育み、機能文体論のなんらかの文体の規範についての情報を与え、そうした文体の特性をもった首尾一貫したある程度の長さのテクストを組み立てる能力を発展させるものでなければならない、とされている。このように実用文体論は、機能文体論と密接にかかわっており、それゆえに本稿の目的でもある「ロシア語教育と文体論」というテーマにも合致する文体論であるいえよう。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р.,*

Салимовский В.А. Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 37, 43-44

20）*Степанова Ю.С.* Стилистика//Языкознание. Большой энциклопедический словарь. М., 1998. С. 492-493

21）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 2

22）*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010. С. 34-35

23）Там же. С. 34-35

24）*Солганик Г.Я.* Стилистика текста.:учебное пособие для студентов, аспиранитов, преподавателей- филологов и учащихся старших классов школ гуманитарного профиля. 3-е изд. М., 2001. С. 113

25）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 2

26）Там же. С. 3

27）Там же. С. 113

28）ただし РКИ（外国語としてのロシア語）によらない文体論そのものの研究書や論考ではこれらのみではなくなってきている。ヴィノクールの記念論文集には宗教的説教の文体についての論文も掲載されているし（*Крысин Л.П.* Религиозно-проповеднический стиль и его место в функционалоно-стилистической парадигме современного русского литературного языка// Поэтика. Стилистика. Язык и культура. Памяти Татьяны Григорьевны Винокур. М., 1996. С. 135-138)、たとえばコージナの2010年の版ではこの５つに加えさらには宗教的文体についての記述が認められる。また社会評論の文体の項では、さらに内部に細分化がみられ、«Стилевые особенности электронных СМИ» や «Вопрос о стилевом статусе рекламных текстов и их стилистике» といったものについての記述が認められる。本稿での論点はこうした大別の問題ではなく、機能的文体における学術の文体の特性を取り出すことなので、ここではそれらについての詳述は省くことにする。また、これら５つの分類の順番と呼び名についても、文献によってさまざまである。本稿では多くをコージナに依っているので、それに従うことにした。*Кожина М.Н., Дускаева Л.Р., Салимовский В.А.* Стилистика русского языка. Учебник. 2-е изд. М., 2010.

29）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 2

30）*Глухов Б. А., Щукин А.Н.* Термины методики преподавания русского языка как иностранного. М., 1993, С. 332

31）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 1

32）Там же. С. 2

33）*Бердический А. Л., Соловьёва Н.Н.* Русский язык: Сферы общения. Учебное пособие по стилистике для студентов- иностранцев. М., 2002. С. 5

34）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 2

35）*Бердический А. Л., Соловьёва Н.Н.* Русский язык: Сферы общения. Учебное пособие по стилистике для студентов- иностранцев. М., 2002. С. 5

36）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 2-3

37）*Бердический А. Л., Соловьёва Н.Н.* Русский язык: Сферы общения. Учебное пособие по стилистике для студентов- иностранцев. М., 2002. С. 5

38）*ПожидаеваГ.А.* Певческие традиции Древней Руси. Очерки теории и стиля. М., 2007. С. 455-456

39）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 7

40）テクスト分析のさいの結果の詳細は、題材としている個々のテクストによって差異が生じてくるのはいうまでもない。テクストの機能文体論的分析がなされているさまざまな文献を参照しつつ、本稿の研究対象である学術の文体の特性の記述にかんしてここでは主として以下の文献を礎とした。Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 2-15

41）*Демидов Д.Г.* Агллютинация внешних именных флексий *-и* и *-ы* в значениях множественного числа// Материалы XXXV международный филологический конференции. Вып. 6: История русского языка и культурная память народа. СПб., 2006. С. 37-43

42）*Садокова А.* Поговорим о Любви // Японская любовная лирика. М., 2001. С. 6-7

43）Стилистика русского языка.Ч.2.Функциональные разновидности русского литературного языка: образцы стилистического анализа и тексты. СПб., 1998. С. 8

44）出典は、本稿執筆者がサンクトペテルブルク国立大学修士課程在学時に受けた授業にて配布された資料である。ただし、本資料は当時の担当教員が作成したもので、そもそもの典拠先が掲載されていないため不明である。

45）*Кожина М.Н.* Стилистика русского языка. Учеб. Пособие для студентов фак. рус. яз. и литературы пед. ин-тов. М., 1977. С. 3-4

46）Там же. С. 4

47）*Акишина А.А., Каган О.Е.* Учимся учить. Для преподавателя русского языка как иностранного. 7-е изд. М., 2010. С. 37-39

48）*Дроняева Т. С., Клушина Н.И., Бирюкова И.В.* Стилистика современного русского языка. Практикум. Под ред. Т.С. Дроняевой. Седьмое издание. М., 2008. С. 6

49）機能的文体をとおして捉えられているわけではないが、英語学ではいかに文学作品を授業に取り入れるか、についての論考もみられる。たとえば、脇本恭子「語学的文体論の大学教育への応用―英語専攻の学生を対象として―」『Persica. Journal of the English Literary Society of Okayama.（岡山大学英文学）』37号、2010年、95-118頁や、W.R. グリーン「文体論と第二言語学習（Stylistics and second

language learning)」『札幌大学女子短期大学部紀陽』28号、1996年、1-10頁。ロシア語にかんしていえば、『授業づくりハンドブック』において文学作品をどうしてもテクストとして用いたいという場合には、そのさいの注意事項とヒントが書かれている。『授業づくりハンドブック』大阪大学出版社、2008年、16頁。また、文学作品の文体に留意しつつその範疇のテクストを読むための教材としては中沢敦夫『ロシア文学鑑賞ハンドブック』群像社、2008年などがある。

50）*Грекова О.К., Кузьминова Е.А.* Обсуждаем, пишем диссертацию и автореферат. Второе изд., испавленное. Учебное пособие. М., 2005. あわせて、*Величко А.В., Юдина Л.П.* Русский язык в текстах о филологии. Пособие для иностранных учащихся. М., 2008 では、語学・文学研究にかんするさまざまな事象について比較的に平易なテクストによって提示され、それらを読みながらこの分野における概念を理解してゆくという展開が配慮されている。巻末には、論文や討論などで使われるべき慣用表現が数多く紹介されている。なお、「学術の文体」に限定するものとしてではなく、全般的に「ロシア語テクストを作成する」ための補助教材として、日本においてもいくつか存在している。たとえば、磯谷孝『ロシア語作文教程』、三省堂、1989年の「はじめに」では、ロシア語で作文を行うさいの「翻訳原理、許容性」研究の必要性についても言及されている。

51）狩野昊子、A. アキーシナ、G. パヴレンコ『ロシア語表現辞典：疑問詞・代名詞・繰り返し構文・小詞の用法、付　間投詞／擬声語／擬態語』ナウカ、1983年。

52）コージナは文体論の理論がまずあって、そのうえに実践があると述べている。*Кожина М.Н.* Стилистика русского языка. Учеб. Пособие для студентов фак. рус. яз. и литературы пед. ин-тов. М., 1977. С. 4

53）*Акишина А.А., Форминовская Н.И.* Русский речевой этикет. М., 1975 や *Акишина А.А., Форминовская Н.И.* Этикет русского письма. Изд. 6-е. М., 2008 など。

54）たとえば雑誌『ナウカ』には、丹羽新一郎氏による「ロシア商業文」と題された連載が、1963年６月号から三回にわたって掲載されていた。ここには商業の分野で取り交わされる書簡の書式や、よく使われるフレーズが紹介されている。